

知的障害

(7) 主な検査の種類と方法及び留意事項

① 知能検査の目的と特徴

知能検査は、主として幼児期から児童生徒期にかけて、子供の知的能力の発達を把握するために用いられます。知能検査は大きく分けて2種類の目的で適用されています。

一つ目は、総合的な知的能力をとらえるための検査として実施される場合で、もう一つは、知的能力をいくつかの因子に分けてとらえるための検査として実施される場合です。

総合的に知的能力をとらえる知能検査は、知的な発達の遅れの有無や遅れの程度を判断する際に用いられます。一方、知的能力をいくつかの因子に分けてとらえる知能検査は、全般的な知的な発達の遅れは認められないが、知的能力に部分的な偏りがあるのではないかと予想される場合や視覚認知と聴覚認知のバランスの悪さなどが想定される場合にも用いられています。

主な知能検査の特徴ですが、まず、検査には、様々な用途の一連の検査器具を使用して、実施には1時間から2時間以上も要する場合があります。検査者は検査器具の取扱いや検査結果の分析にも習熟している必要があります。講習や研修などを受けて、検査に熟達していることが求められます。また、検査課題の教示に言語が用いられる知能検査の場合は、子供がある程度の言語能力を獲得している必要があります。そのような意味で、知能検査は就学前であれば、実施することが可能となります。就学後においても、言語発達が著しく遅い場合や、発達の偏りが特に言語の使用において困難を引き起こしている場合などには検査を実施することが難しく、実施しても正確に子供の知的能力をとらえていない場合も考えられますので注意が必要です。

知能検査からは、子供のつまづきを理解するためのかなり具体的で詳細なデータを得ることができますから、支援の方策を立てる上ではかなり有効なツールとなることが期待されます。

② 知能検査の種類

知能検査法には、大まかに2種類の検査法があることには既に触れました。まずは、総合的な知的能力を測る検査法について説明します。

この検査法では、その子供の精神年齢（MA）算出できますので、生活年齢（暦年齢）と比較して、概ねどの程度の知的な発達が達成されているかを把握することが可能となります。これは、言い換えれば、実際の年齢で期待される知的発達を達成しているかどうか

を知ることができますし、また、どの程度、達成されているのか、いないのかを知ることができます。同時に、学校などの集団場面において、平均的な同世代集団の中でのその子供の相対的な位置を知ることにもつながり、学習の進捗や到達度とのギャップを知ることができます。これを「個人間差」といいます。

次に、知的能力をいくつかの因子に分けてとらえる検査法について説明します。この検査法の利点は、例えば、知的能力というものを、聴覚から入る情報を処理する能力（聴覚認知）と、視覚から入る情報を処理する能力（視覚認知）とのバランスによって成り立つものと想定して、いくつかの検査から構成されていますので、具体的にどのような課題に得意や不得意があるかを把握できるというところにあります。これを「個人内差」といいます。

IQの値が知的発達の遅れの範囲にある場合でも、どの因子にも全般的に遅れが認められて個人内差があまり見られない場合と、因子間のばらつきが大きい、すなわち個人内差が大きい場合があります。知的障害を伴う自閉症のある子供の場合は特に注意が必要です。それぞれの因子の知的発達の偏りや特定の能力の落ち込みを考慮した指導の手立てが必要になります。例えば、視覚認知と比較して著しく聴覚認知が落ち込んでいる子供の場合を考えてみましょう。このタイプの子供は、いくら口頭で指導を繰り返してもなかなか子供の理解にはつながりません。図や絵、写真などを使った視覚的な教材を多く用いるなどの工夫や支援が必要になります。また、視覚的な教材を用いる際には、知能検査によって示された概念理解の程度に合わせて、具体－抽象のレベルを子供に合わせることも必要です。

③ 知能検査の留意事項

知能検査を実施する際にはいくつかの留意事項があります。

まずは、子供が潜在的にもっている能力を十分に発揮できるように、事前に緊張や不安を取り除いておくための配慮が必要になります。例えば、検査に入る前に自己紹介をする時間を設けてリラックスできるようにするなどです。知能検査は、かなり長時間にわたる場合もありますし、ある程度の知的能力があれば、自分が課題に成功したか失敗したかを理解することができますので、検査中もかなりの緊張や不安を感じながら集中力を維持し続けることが求められます。この検査を最後までやり終えることができるように検査者は適切に子供を支える必要があるといえます。

さらに、発達検査とも共通することですが、知的能力の遅れが明らかになることが、イコール障害者というレッテルを貼られてしまったように感じて、子供本人や保護者の心を深く傷付けてしまう可能性もあるということを心に留めておくことが必要です。そうならないためにも、やはり、事前に知能検査をすることの意義について丁寧に説明し、了解を得ておくことはとても重要であるといえます。

検査を実施することが有効な支援につながっていくのだという安心感を共有するためにも、子供と保護者が日常の中で困っていること、悩んでいることを丁寧に聴き取り、観察

することから始める方がよいと考えられます。